

社
馬

峰



八月号

第4卷 第3号

通卷 第28号

巻頭の言葉

法華經付囑の人とは如何なる人か 4

自我傳講義へ久遠の本仏と人間釈尊／その九

日蓮聖人の大マンダラと本仏釈尊との関係 日高白象 6

信仰体験談

お墓の内の母とその子 沢田覚象

この切ない母性愛について

信仰相談室

世界の平和は実現するか 日高白象 24

本誌発行についてお詫びとお願ひ 28

本妙庵に電話開通 暑中見舞 31

良書紹介 33 編集後記 32

を受けた人々

これは譬えてのことなのですが、学校の教室で先生が生徒に教えるにしても、生徒が先生から教わるにしても、先生には先生としての、生徒には生徒としての、資格というものがあるはずです。それと同様に法華經を信ずるにしても弘めるにしても、それなりの資格というものが付囑されていなければなりません。といつてもそれはいやしくも人間の魂の問題である以上、お金で買えるものでもなければ、本山や宗務院等から下附されるようなものでもありません。法華經の經文に照してみれば第二十一章の如来神力品に示されている通り、實に久遠の本仏釈尊じきじきに授与されるものなのです。本仏釈尊より、法華經を受持し宣布するよう、じきじきに付囑をうけた人々……これを教學上「本化の菩薩」とも「地涌の菩薩」とも或は「本化地涌の菩薩」とも申されていますが、それらの人々は第十五章の涌出品に示されている通り、既に久遠劫來、本仏によつて教化され、本仏の仏界中にあつて、常に退転なく、本仏の本法を修行し来つていた人々のことなのです。従つて本化地涌の菩薩たちは、(一)釈尊こそ久遠の本仏そのものであるということ、(二)法華經こそ本仏釈尊の生(なま)の教法(本法)そのものであるということ、

法華経の付囑

(三)本法受持の當處こそ本仏の法界そのものであるということを、肌身に感じて領地していたのです。さればこそ法華経が、それの人々に対し初めに付囑されたと申せましょ。

これを逆に言うならば、如何に法華経を行じているようではあつても、少くとも以上の三点をわきまえないでいる人々は、未だ法華経の付囑をうけた者でもなく、地涌の菩薩でもないと断定されよう。ところがそういう人々が日蓮宗といわず創価学会といわず日蓮門下の各宗、各派、各教団の中に、あまりにも多いのです。そしてのはずれなことを信じ、本法を曲折しながら派閥と因襲に押し流しているのです。これでは成仏しようにも、しようがありません。いやしくも法華経を信する以上、たとえ身は不淨なりとも智慧は愚かなりとも戒徳は備えずとも、本仏釈尊よりジカに法華経を付囑された人間の一人でありたいのですね。釈尊を本仏そのものと仰ぎ、法華経を本仏の生の声と聞き得る時、既に本仏果海中にあつて久遠劫来、本仏と共に生きて来た不滅の己れの命を見出していることでしょう。この人の命は本仏と共に未来また久遠なのです。

久遠の本仏と人間釈尊 ハその九▽

日蓮聖人の大マンダラと

本仏釈尊との関係

日 高 白 象



18

が、その原因の一つに、こうした論争が根ざしている
のです。

古来、宗門の歴史の上では、
——釈尊が本仏なのか——
——法華經（お題目）が本仏なのか——
という論争が長い間、戦わされて来ました。そして
この論争は、今日なお門下教学上の重大問題として取
りあつかわれているのです。日本佛教界において日蓮
門下ほど宗派、教団の分裂蜂起したものはありません
然し、大マンダラを形式的にみずには、内容的にみる

ならば、大マンダラがあくまでも靈山虚空会上の本門

來神力品の中において、

八品の儀相を象徴するものである限り、多宝如来と二

要をもつて之れを言わば

仏並座した釈尊が、第十五章の從地涌出品において地

如来の一切の所有の法

涌の本尊を涌出せしめて、みずから久遠の儀相を整

え、次の第十六章の如來身量品において、みずから久

遠の本体を開頭されたのですから、大マンダラのお題

如來の一切の秘要の藏

目の左ほの釈尊こそ、実は久遠の本仏そのものである

如來の一切の甚深の事

ことは言うまでもないことであり、また大マンダラの

皆この經において宣示顯説す

中央のお題目というものは、前にも述べましたように

法華經とは、本仏釈尊の一切の功德を、色香も変え

まいはなし私尊が、本仏としての自内託を言葉として表

す、一分も漏らさず、宣示顯説されたものであり、更

現し、音声として十万虚空無邊に響き渡らしめている

にその教法が、行法として妙法蓮華經の五字に詮要さ

教法を、そのまゝ大聖人が、色香も変えず末法の行法

されたものであつたればこそ、大聖人みずから觀心本尊

として、大マンダラの紙面に表現されたものなのです

鈔の中で、

——法華經益山虛空会上の本門八品の教法が、本仏釈

釈尊の因行果徳の二法は
妙法蓮華經の五字に具足す

尊みずからの、内証仏法そのものであり、因果の功德

そのものである——

ということについては、既に法華經の第二十一章如

思うに、これまでの仏教では、教法の奥に悟りの觀

心があるとして、教法は観心の手段とみなし、「教観相対」という教判を立ててきました。然し法華經では既に教法が本仏の觀心そのものである以上、「教観相対」の教判は否定され、「教観不二」「教観一体」という教判が樹立されるのです。こゝにおいては、もはや教えによつて行を起し、行を通して悟りへ迫るというのではなく、教法を受持すること自体が成仏の道を行じているのであつて、ここに「受持成仏」ということが言い得るのです。

蓋し、如何に法華經が本仏の觀心そのものであるとはいつても、そのことによつて直ちに法華經を本仏そのものであると即断することは、とり返しもつかない大きなあやまちを犯してしまつもとなるのです。

今日の日蓮門下各宗、各派、各教団の殆どものが大マンダラを本尊と仰ぐ時、その中央に大書されているお題目を本仏そのものとみなし、お題目の左脇の釈尊を応身仏とみなして、

—— 称尊も、法華經を修行することによつて成仏出来た述仏にすぎない。むしろ法華經の本法を修行する我々法華經の行者こそ体の仏であり、称尊に主師親の三徳をこうむらせるのは、実は我々の用の働きにはかならない——

—— というが如きに至つては、下判上も甚しき重大な謬を犯してしまつてゐると申せましょう。

要するに法華經は、本仏の次元における教観一体不二のものではあつても、決して本仏そのものではなくあくまでも本仏の功德としての本法なのです。この区別を明確にしておかねばなりません。

たとえば大聖人が、よく用いられた譬えに、母親の慈愛と、母乳と赤坊の例があります。母親は赤坊をいつくしんで乳房をふくませます。赤坊はこれによつて成長して行きます。この譬えをとつていえは、この母親こそ本仏称尊のことであり、この母乳こそお題目のことであり、そしてこの赤坊こそ我々一切衆生のこと

なのです。

この場合、母親と母乳とは切つても切り離されないものではありながら、やはり母親は母親であり、母乳は母乳であつて、赤坊にとつて価値に変りはないにしても、明かに誰がみても母親と母乳とを同一視することは出来ません。それと同様に、釈尊と法華經もまた切つても切り離されないものでありながら、しかもそこには厳然とした区別が立てられるのです。

大聖人が、本尊・題目・戒壇の三秘郎一を主張され

ながらも、やはりそこに本門の本尊・本門の題目・本門の戒壇という三秘を流出されたわけがあるのです。今、母親と母乳の例をとりあげましたが、もう一度この例を用いますと、赤坊にとつては母親と母乳とは価値に優劣はないものではあつても、母乳あつての母親ではなく、母親あつての母乳であるように、本仏釈尊と法華經とは本末一体不二なるものではありながらも「法華經あつての本仏釈尊」でなく「本仏釈尊あつ

ての法華經」であつて、このことは決して誤つてはならない肝心なことです。

なるほど世の学者の中には「釈尊あつての法華經」という説に対して、

——それでは在世の釈尊は、何を本尊としていたのかみずからを本尊としていたのであれば、これほどの増上慢はあるまい。それとも在世の釈尊には本尊は無かつたのか——

とか、

——釈尊以前に既に無量の諸仏がいて、それらの諸仏によつて既に法華經が説かれていた、ということが多くの經典にみえているが、この事実は一体どう解釈すればよいのか——

とか、或はまた、

——釈尊みずから「私がこの世に現われる現われないにかゝわらず、この法は常に嚴存している」と述べられてゐるが、この言葉は、よもや否定することは出来

まい——

というような意見を綴々述べることによつて、むしろ「法華經あつての釈尊」という説を主張されることでしよう。

然し法華經は、たゞ單なる天地不朽の理法というものではなく、釈尊によつて初めて完成された絶対なる智情意即一の功德体なのです。

この功德体は、釈尊の正覚を時点として、天地きわみなく円融しており、またこの時点における正覚内容を基軸として、これを悠久なる過去世に普遍すれば、必然、無量の諸仏によつて法華經が説かれたという方便説も成り立つものであり、或はまた「釈尊の出、不出にかゝわらず、この法は実在している」ということも言い得るのです。

蓋し、釈尊以前において既に法華經が在々処々において説かれていたとか、或は法華經が実在していたといふことを言明されたのは、ほかならぬ釈

尊その人であつたということを、失念してはならないと思ひます。

若し釈尊が、そう言われたからといつて、釈尊を抜きにして、その法の実在を信じたならば、その法は、もはや釈尊の人格を通さない抽象的な單なる真理（理法）と化してしまい、いわゆる釈尊の因行果徳の法華經ではなくなつてゐるのです。

釈尊が説かれたところの、釈尊以前における法華經は、実は靈山虛空会上の本門八品に説かれた法華經と同一内容のものであり、八品説座を時点として、悠久の過去の在存が悉く現在に来つておればこそ、過去を開顯して、そのように申されたのであります。

肝心なことは、そのように仰せられた釈尊の心であります。この心を知らずして、釈尊以前に既に法華經があり、法華經によつて釈尊の成道がある、主張することは大きな誤りと申せましよう。

なお次に、

——法華經が本尊でなかつたならば、在世の釈尊は何

を本尊としていたのか。みずからを本尊としていたのであれば、これほどの増上慢はあるまい——

という反論が残つてゐるようですが、釈尊は、みずからを光明とし、みずからをよりどころとされ、そしてみずからを無上の勝者とされていました。

それにもかゝわらず、釈尊ほど謙虚な方はなかつたのです。成道後、入滅に至るまで、常に四恩に報ずべき法を説きつゝけ、毎月十日毎にみずからの身口意の三業を反省して、大衆の前に立つて懺悔しようとされ入滅の眞際には、八十年の生涯をふりかえつてまでも人界受生一期のことについて懺悔すべきことがあれば、すべて懺悔しようとされたのでした。

厳しく自己を律し、身口意の三業にかけて、一点の非もゆるがせにせず、仮借なきまでにも懺悔しようとした釈尊の生涯…………そこに仏陀たる者の、まるとの姿を見る思いを禁ずることが出来ないであります。

よう。

以上これを要するに、本仏釈尊あつての法華經であり、本仏釈尊あつてのお題目なのであつて、靈山虚空会に、多宝如來と二仏並座された釈尊こそ久遠実成の大仏そのものであり、八品虚空会を象徴した大聖人の大マンダラの、その中央に大書されているお題目は、二仏並座された本仏釈尊の自内証（因行果徳の二法）が本仏の本法として十方虚空無邊に光明として光り輝き音声として高き渡つていてそれを文字として象徴したものであり、これを図示するに当つて大聖人が、二仏の中央を突きぬけて大マンダラの紙幅一杯に光明点の筆法をもつて現わされたのであります。

お墓の内の母とその子

この切ない母性愛について

沢田覚象



この物語は、今より四、五年前
京都福知山市で実際に起つた出来
事です。

それは懷妊したまゝの体で死ん
だ一人の主婦が、土葬されたお墓
の中で子供を生み、生れたばかり
の我が子に対して、靈となつてしま
でも、切々たる母情をそゝいだと

いう、世にも奇怪な、そして余り
にも切なく、余りにも尊い物語な
のです。

1

ことの起りは、福知山市の石原
(いさ)という町に住んでいる一
人の婦人が、人に紹介されて御主
人と一緒に、私の母の道場にやつ
て来たことから始まります。

もとよりこの夫婦は、初めて米
たちでした。その名前は……

そうですね、本名を出せば、さし
さわりがあること、思われますの
で、仮りに御主人の名前を長尾富
夫さん、奥さんの名前を道子さん
とでもしておきましょ。

さて道子さんが、道場へ来るな

ないのです。

り、初対面の挨拶もそこへに、
さつそく私の母に訴えたことは、

何かサワリでもありわすまいか

「私が主人と結婚してから、もう

と思つて、色々御祈祷もしてもら

数年になります。その前は何で

いましたが、それすら何の効果も

もなかつたのですか、結婚して以

来、毎週土曜と日曜になると、き

まつて腹がせいで来て、腰も張り

裂けるばかりに痛み出します。そ

れは／＼どうしようもないほどの

腹と腰が痛むのです。

苦しさでした。

あまりの苦しさに医者にかかりました。婦人科や内科や、色々な

医者にみてもらいました。然しあれに行つてもよくなりません。お灸をすえたり、ハリも打つてもら

いました。然し、少しもきめが

いた。私の病気をおおして下さい」ということでした。

全く不思議な病気もあつたもの

ですね。毎週土曜と日曜の二日だけ、急激な痛みにおそれ、月曜

になるとケロツとなおり、それが

毎週、定期的に、しかも何年もの間つゞいているというのです。

御主人の富夫さんも、奥さんのそばで、

「奇妙なことです。困つたことで

す。切角の日曜日でも女房の看病に追われて休むことも出来ません

女房も苦しいでしようが、私も

やりきれたものではありません」

と頭をかゝえこんでいる始末でした。

然し愚痴は、何時まで聞いていいともキリのないものです。母はさ

つそく長尾さん夫婦を、道場の御宝前へ案内しました。

折から道場に來ていた二、三の信者さんたちも、一緒に御宝前に

集りました。

そして母と共に、自我偈を十巻

ばかり唱え、お題目を唱えはじめ
て暫らくすると、奥さんの道子さ
んが、急激な腹痛を訴えはじめ、
やがて半狂乱の神がかり状態とな
つて暴れ出しました。

後で聞いたのですが、道子さ
んが神がかり的な状態になつたの
は、後にも先にも、この時が最初
にして最後でもあつたそうです。

御主人の富夫さんですら、ソー

とするような思いをしながら、
「あちらこちらで御祈祷をしても
らつたことはあります、こんな
ことは全く思いもかけない初めて
のことです」

と、いぶかしがつていたほどで
した。

道子さんの半狂乱的な神がかり
状態は、しばらく続きました。眼
をつりあげ、手をふり、髪も振り
乱し、全体体を打ちふるわせなが

ら、道場せましと蹴ね廻るのです
口からは泡をふき、野獸のよう
に咆哮する中には、号泣の声すら
まじつていきました。

いな、その咆哮にしても号泣に
しても、身も引き裂かれるような
悲愁の底から、つきあげて來
るかのようでした。

身の毛もよだつような神がかり
状態……それが女性であるだけに
肌も泡だつ懊惱そのものでした。

御主人の富夫さんにとって、並
みいる信者さんたちにしても、こ
の戦標すべき姿をまのあたりにし
ては、反射的に一心不乱に、お
題目を唱えずにおられなかつたこ
とでしよう。

わけても、こうゆうことを初め
て体験した富夫さんは、

へどうか道子の狂乱状態が、一刻
も早くおさまりますように……
と、おのゝきながら祈つたこと
でしよう。

富夫さんにしては、生れてはじ
めて唱えるお題目であつたようで
すが、もはや恥も外聞もなく、ま
るで叫ぶようにお題目を唱えてい
ました。

然し、道子さんの神がかり状態

は、ます／＼ひどくなるばかりで
した。

独り、私の母だけが落ちつきは
らつて、じつと道子さんの状態を
みすえながら、静かにお題目を唱
えていました。

やがて道子さんの呻嘆と号泣は
むせぶような悲泣と代つて行きま
した。
それについて人々の唱えていたお
題目の声も、次第に低くなつて行
きました。

道場の真中には、消え入らんば
かりに泣き崩れる道子さんの、な
お靈にのられたまゝの姿がありま
した。人々は車座になつて、その
ますから……」

姿を凝視していました。

一瞬、時計の針もとまつたよう
な恐しい沈黙が流れました。そう

です、何かが勃發するかのような
無気味な緊張をもつた沈黙でした

時に母が、

「あなたは、どなたですか」

と尋ねました。それは、静かな
やさしい言葉でした。

「ね、どなた、どなたなの……」

再び尋ねました。然し何も答え
ず、如何にも、もの悲しげに、さ

の家内なのです」

と告げる富夫さんの顔にも涙が
滂沱とあふれていました。

実は富夫さんは、先妻の君子さ
んに先き立たれてから間もなく、
今の道子さんと再婚していたので
す。

と言うと、始めて顔をあげ、溢
れる涙をふきながら、

「私は君子……君子です」

と名乗るや、カバソト泣き伏し
てしましました。

「君子／お前が君子なのか／」

富夫さんは思わず叫んで、身を

乗り出しました。そしてハツと氣
付いて、母をふりかえりながら、

「君子は、数年前に亡くなつた私

の家内なのです」

そして先妻の君子さんの靈が、

後妻の道子さんの体に乗りうつって、この騒ぎとなつたのでした。

これより君子さんの靈が、道子

さんの口をかりて、限りなき悲し

みを涙ながらに、静かに物語りは

じめたのですが、それはそばで聞

き入る夫の富夫さんとしても、信

者さんたちにしても、そして私の

母までも、涙なしでは聞くことの

出来ない、あまりにもいたましい

あまりにも尊く切ない、母性愛の

物語でした。その概要を取りまと

めると、およそ次の通りです。

2

数年前、君子さんが亡くなつた時、君子さんは妊娠七ヶ月という

体でした。

「そうです。君子は大きなおなかをしてしまって亡くなりました。当時

の私は、妻と子供と一緒に失つた

ような思いでした。

お通夜の夜、妻の遺骸をオキシ

フルで拭き清めた時の、あの大き

なおなかと胎子のことが、その後

随分長い間、瞼にちらついて離れ

なかつたものでした」

と富夫さん自身、今でも語つて

いるほどです。

しめやかなお葬式のあと、棺は

埋葬されました。埋葬は火葬ではなく土葬でした。丹波の田舎のこの

地方では、今でも土葬は珍らしく

はないのです。

ところが、ことある間に埋葬

後ほどなく、お墓の内で赤坊が生れたのです。

妊娠七ヶ月の胎子は、医学的に

も早産しやすいといわれています

が、いくら何でも陣痛の起りよう

もない死体から、赤坊の生れるど

いうことがあるのでしょうか。

若し生れるとすれば、死んだはずの母親の母体に、何かの変化が

起つたというほかはありません。

或は、埋葬されたお墓の内で、

一時母親が息を吹き返して陣痛を

催し、赤坊を生んでから、再び息

切れたのかも知れません。世の中

には死んだ人が、数時間後に、息を吹き返したという例は、ないで

もないことなのですから……。

然し、道子さんの口をかりた君

子さんの靈は、このように言つて
いるのです。

「——私は子供を生みたかった。

生みたい生みたい。お腹の子供を

生んで死にたい。どうせ助からな

い自分の命なら、せめて子供だけ

の命は助けて死にたい。——

——神さまさま、私は今まで

信仰をしたことはありません。何

と祈つてよいのか、祈り方も知り

ません。——

——けれど、どうか神さま仏さ

ま、私の命はいりませんから、ど

うか、お腹の子供の命だけは救つ

てやつて下さい——

私は祈りに祈りつづけました。

その中、体の方がグン／＼暗い冷

い死の世界の中へと引きずり込ま
れて行きました。私は叫びました

夢中で絶叫しました。

——私の赤チャン／＼私の赤チ

ヤン／＼

……ふと気がつくと私は、お

墓の中で赤坊を生んでいました。

神さま仏さまは、私の願いをかな

えてくれたのです。嬉しかつた。

本当に嬉しかつた。文字通り狂喜

しました。

然し、それも束の間でした。お

墓の内では、赤坊に着せる肌着も

なければオシメもありません。お

れで困つて夫のために、私に

乳を与えると思つても、私の肉

体は死んでいました。

——肌着が欲しい。オシメが欲し
い。ミルクも欲しい——

私は狂わんばかりに泣き叫びま
した。その上、生れた赤チャンに
は、まだ名前もついていないので
す」

君子さんの靈の声は、悲痛その

ものでした。靈の声は更につづき
ました。

「私が、お墓の内で、こうした思
いを思いつづけている中、地上で

は夫の後妻として、今の道子さん

が家に来てくれました。

私は喜びました。私に先き立た

代つて尽してくれる道子さんに、

感謝したい気持で一杯でした。

と同時に、やはり女は女同志です。私は私なりに道子さんにつがりました。すがりついて頼みました。

——道子さん、お願ひです。お願いですから私の赤坊に、肌着の一枚でもいいから縫つて着せて下さい。ミルクの一纏でもいいから買つて飲ませて下さい——

私は夫にすがりました。

——あなた、私たちの赤チヤンに名前をつけてやつて下さい——私の願いは、たゞこればかりであつたのです」

腸もちぎれるような、悲痛さわみなき嗚咽と共に語る君子さんの

靈の言葉は、以上の如くでした。

いていたのです。

何と切ない母情でしょう。何と

3

尊い母性愛をしよう。死に行く我が身は、もはや助からなくても、お腹の内の子供の命だけは助けたいと、臨終のまぎわ、神仏にすがつて絶叫しつづけた母親の此の一念……。

そして赤坊が、お墓の内で生れ るや、肌着の一枚でも着せ、オシンメの一枚でもあてがい、ミルクの一サジでも飲ませてやりたい、と 灵の心を感じ、靈と共に泣く。そこに信仰というものがあるので しよう。

時に母が、「君子さん、よく判りました。これまでのあなたの心が、よく判りました。さぞ悲しかつたことでしょ

こうした一念は、その後、数年後の今日でも、切々としてつづ

こうした一念は、その後、数年後まであなたの心が、よく判りました。さぞ悲しかつたことでしょ

う。

富夫さんにも道子さんにし
ても、そうしたあなたの心が、凡

夫だから判らなかつたことゝはい
え、今では心からすまなかつたと
思つてゐることでしよう。

さつそく私からも、あなたの思
い通りにさせてあげますから、ど
うか安心して、一日も早く成仏し
て下さい。

そしてあなた自身も、子供のた
めに法華經を信じて、お題目を唱
えて下さい」

と、やさしく、いたわるように
「ん」とさとしました。

富夫さんも涙にむせびながら申
しました。

「君子、許してくれ、お墓の内で
子供が生れていたとは、今が今まで
知らなかつた。」

赤坊の肌着も着物も縫つてあげ
るよ。オシメも作るよ。ミルクも
買つてお墓へ持つて行くよ。

赤坊の名前もつけよう。ね、何
という名前かいゝ?……お前と私

の赤坊だから、一緒に名前をつけ
ようね」

君子さんの靈は満足そうでした
それは臨終より数年も経て、はじ
めて得られた満足でした。

富夫さんは赤チヤンの名前を三
つ作つてみました。その中の一つ
を君子さんの靈が、みずから選び

出しました。そして、さも安心し
ました。

切つたように、

「南無妙法蓮華經く……」

と声も高らかに唱え出したので

す。一同もこれに唱和しました。
靈は静かに道子さんの体から離れ
て行きました。それは誠に感動に
みちた嚴肅な結着でした。

その夜、道子さんは自宅で、さ
く赤坊のために、真新しい白

の晒で着物、肌着そしてオシメま
で作り、翌日、ミルクを買つて富
夫さんと共にお墓に詣で、それら
の品々をおそなえして、おぼえた
ばかりのお題目を心から唱えたの
でした。

さて次の土曜日、恐れていた道

子さんの何時もの病気は、嘘のよう起きませんでした。翌日曜にも起りませんでした。次の土曜にも起りませんでした。次に今日まで、既に四、五年もたつているのです。

こうしてみれば医学によつても

よくならなかつた道子さんの、毎週土曜と日曜に限つて起つていた

奇病こそ、先妻の君子さんの靈の頼つていたせいであり、君子さんのお靈が、

お腹の子供を、生みたい、生みたい――

と思いつめていた一念によつて

頬られた道子さんの体の上に、物凄く腹がせき、腫も張り裂けると

いう、全く陣痛と同じ状態が起きていたのだ、と申されましょう。

ところで、こゝに問題として残るのは、果して君子さんが、お墓

の内で赤坊を生んだのかどうか、

ということですが、然し、これも

君子さんの一念の中の所産とみれ

ば、合理的な解釈もつくはない

でしようか。

それにしても、死んだ後、靈と

なつても、子を思う母性愛の深さ

切なさというものには、つくづく

と思い直さずにはおられないもの

がありましょう。

4

お墓の内に子供を生んだといえ

ば、これによく以た話しが、江戸時代にもあります。参考までに述べてみましょう。

京都の町の或るアメ屋の店に、夜ごとアメを買いに来る婦人がいました。美しい婦人でしたが、何

時も、もの淋しい風情でした。

婦人は毎夜、きまつた時刻にア

メを買いに来ました。

あまりのことに、いぶかしがつ

たアメ屋の主人が、或る日、そつと婦人のあとをつけてみました。

足音もたてずに歩く婦人は、町

を通りぬけて、やがてお寺の門を

くぐりました。

アメ屋の主人は、鬼氣せまる思

いをしながら、なおも後をつけて

行くと、婦人はお寺の墓地へ入りました。

山寺の夜の墓地は、妖氣につゝまれて無氣味に静まりかえつていました。地底のような無氣味さでした。

男がお墓の影から、鬼を殺して

女の様子をうかゞつてみると、女は、とあるお墓の内へ、すうーと入りました。と同時に、闇を切ぎ裂くような赤坊の、けたゞましい泣き声が起りました。

男は膽をつぶしました。頭をかえてお寺の車裏に駆け込みました。騒ぎを聞いて住職が、みずからチヨウチンをつけて墓地へ行くと、女の姿の消えたお墓の内から

かすかに赤坊の泣声が聞えて来ました。

住職は、さつそくお墓を掘り起してみました。土葬された真新しい大きなカメの内には裸の赤坊が母親の死体に重つて、小さな手足を動かしていました。

住職が、この赤坊を引き取つて育てたことは申すまでもありませんが、この赤坊こそ、後に宗門不朽の名説教師とうたわれた靈鷲院日審上人、俗に壺日審上人という人であつたということです。

この妖怪談は、あまりにも有名ですが、果して日審上人の出生の史実かどうか、明確ではありません。

——靈鷲院日審上人の書判が、世にも珍らしい壺の形をしているところから、壺がお墓のカメ壺と転じて、この妖怪談と結びつけられたのであるまいか——

ともいわれています。

いずれにしても日審上人は、京都日蓮宗本山、立本寺の貫首となり、その生涯、高座説法すること二万余座、受教者九万余人、大マングラ本尊を授与すること十万余幅といわれ、時の天子であつた後水尾天皇に法華經を進講しては、「朕、仏法において今日疑なし」と讃嘆され、八条ノ宮智忠（のりたゞ）親王は、みずから弟子の

礼をもつて仕え、公卿の二条康道（やすみち）や近衛信尋（このえのぶひろ）も信徒となり、徳川三代將軍家光の側室であつた藤枝お夏もまた、有髪の弟子となつて、順正院という法号をさずかつているほどです。

このような日審上人の布教力には、全く驚嘆するほかはありませんが、上人が常に弟子を諭められた言葉の中に、

「伝道の要は、たゞ信力にあり。

汝の名利をむさぼるなれ。平等の慈を学べよ」

とある一文こそ、今日の宗門僧侶として最も三思すべき頂門の一

針であります。

余談ではありますが、この日審

上人の真筆大マンダラ御本尊（大幅のものですが）それが福知山の母の道場に、ずっと以前から掲げられていますが、若し日審上人が

言い伝えの通り、お墓の内で生れ

たものであるならば、長尾さん夫

婦の此の一件が、母の道場で解決

されたというのも、また何かの因縁とでも申されましよう。

父母の恩、重きこと天の極まり

なきが如し。善男子、善女人よ

かくのごときの恩徳、いかにして報すべき。

仏説父母恩重經に曰く、

母に十種の恩徳あり、何をか十

種となす。

一には懷胎守護の恩。

二には臨産受苦の恩。

三には乳哺養育の恩。

五には廻乾就湿の恩。

六には洗濯不淨の恩。

七には嘔苦吐甘の恩。

八には為造惡業の恩。

九には遠行懺念の恩。

十には究竟攝恩の恩。

仏すなわち偈を以て讀めてのたまわく。

慈母、子を胎めば、十月の間に

血を分け、肉を彌ちて、身、重

病を感じ。子の身体、これによ

りて成就す。

一には懷胎守護の恩。

二には臨產受苦の恩。

三には生子忘憂の恩。

月満ち、時いたれば、業風催促して、偏身痘瘡し、骨節解体して、神心惱乱し、忽然として身を亡ぼす。

もしそれ平安なれば、なお蘇生

し来るが如く、子の声を発するを聞けば、己れも生れ出でたるが」とし。

その初めて生みし時には、母の顔、花のごとくなりしに、子を養うこと数年なれば、容(かたち)すなわち憔悴(しようすい)す。

水のことき霜の夜、氷のことき雪の晩にも、乾ける処に子を廻わし、湿(しと)れる処に己れ臥す。子已が懷に屎(くそ)ま

り、或はその衣に尿するも、手みずから洗い濯(そゝ)きて、臭穢を(いと)うことなし。

食味を口に含みて、これを子に哺(ふく)むるにあたりては、

苦(にが)きものは、自から嘔(の)み、甘きものは吐きて子に与う。

もしそれ子のために、止むを得ざることあれば、射(み)ずから悪業を造りて悪趣に堕(お)つることを甘んず。

もし子、遠く行けば、帰してその面を見るまでは、出でても入りてもこれを憶(おも)い、寝ても寤(さ)めてもこれを憂う

んことを念(おも)い、己れ死に去りて後は、子の身を護らんことを願う。

かくの如きの恩徳、いかにして報すべき。

孝と申すは高なり
天高けれども
孝よりは高からず
また孝とは厚なり
地厚けれども
孝よりは厚からず
聖賢の二類は
孝の家より出でたり

信 仰 相 談 室

世界の平和は実現するのか

解 説 日 高 白 象

おたずね

今日、世界の状勢をみれば、ベトナムといわば東南アジアといわす、中近東においてもアフリカにおいても、先進国は言うに及ばず

後進国においてすらも、全世界は米ソの二大陣営に分れて、国と国とが、民族と民族とが、そしてイズムとイズムとが相争つて、さながら未だ斗諍堅固の様相を呈しています。

おこたえ

たとい、現在の世界状態がどうあろうとも、世界の恒久平和は、何時かは必ず達成出来る、と確信します。

こんなことでは何時になつたら人類の地上に、恒久平和がおとずれるのでしょうか。それとも平和というものは、人類のはかない夢にすぎないでしょうが。

何故ならば、世界中のどの国の人々であつても、白人といわば黒人といわば、一人残らず悉く仏性をもつてゐるからであり、またその仏性を開闢する法華經が、仏滅後なお厳然として存在しているか

然し、若しこれが実現するとするならば、それは何時、どういう人々によつて、何處から、どういう方法によつて遂行されるのでしようか。

らです。

法華経に貫していいる教えは、一切開会（いつさいかいえ）——生きとし生けるすべての者、ありとしあらゆるすべてのものゝ、その迷言、確執を解き開いて、眞実に会当せしむる）という大法門であり、この大法門が実践されるところ、一切の対立は悉く消除し、地上に絶対平和の世界（淨仏国土）の建設されることは、仏陀の予言されているところです。

いな、この法華経の骨目である靈山八品虚空会の儀相においては既に久遠の本仏釈尊を中心として法華経によつて統一された絶対平和世界が顯現されており、またこ

の世界を象徴したものが、日蓮大聖人の大マンダラでもあつたのです。

既に、本仏釈尊によつて完成された淨仏国土が、十方法界に厳然として実在している以上、その法華經の如說に実践されるところ、ま人類の地上に写し建てられるはずです。法華經を信する者は、この未来を確信しています。

では「如何なる時に、それが実現されるのか」というならば、大聖人の御指南の通り「天下万民諸乗一仏乗となつて、妙法ひとり繁盛せん時」という、そういう状態が世界中に到来した時であり、い

うなれば一天四海皆帰妙法の大理想が、文字通り達成された時にはかなりません。

ところで「こういう時代の実現を可能ならしめる国は、地上いかなる国であるのか」というなれば世界百数十ヶ國の中でも、法華經を留めている国は日本たり一国であり、その精華が發揚されたのも日本国の日蓮大聖人によつて初めて成しとげられたのですから、世界の間は日本國を本として照破されて行く、と断言されましょ。然し日本國といえども、一都一道二府四十二縣という広い地域があります。「その中で法華經広布のよりどころとなる場所は、如何

なる地点であるのか」といふなれば、それは天下の景勝地、等といふ特定の地域であるわけではなく

法華経が如説に実践されているところであれば、そここそ法華経広布の当所であり、またその人をたずねねば、とりもなおさず如説修行の人をさしあて他にあるわけはありません。

然しながら、日本国中における数ある日蓮門下の中でも、如説に法華経を実践している人、即ち大聖人の御心にかなう人といふのはあたかも大地の土にくらぶれば爪上の土の如く、まことに稀でしかありません。

宗派教団の寺院殿堂や、それら

の組織の中につつて、如何に威儀を整え、力を誇示し、教理教学を

巧みにしてはいても、如法に法華經を受持し実践している人でなければ「法華經の付囑をうけた人」とはいえないのです。

經文によれば、本仏釈尊より法

華經の付囑をうけた人々のことを

地涌の菩薩と称し、その数は六万

恒河沙（無量無辺）といわれています。

然しながら、日本国中における

数ある日蓮門下の中でも、如説に

聖人の御心にかなう人といふのは

あたかも大地の土にくらぶれば爪

上の土の如く、まことに稀でしか

ありません。

です。

然し、それらの少数の人々の、

まことの信行が、やがて人を動かすに至ります。イエス・キリスト

し、世を動かし、世界全体を動かすに至ります。イエス・キリスト

トでさえもマタイ伝、第十七章の

中で、

まことに汝等に告ぐ

若し芥種（からしだね）

一粒ほどの信仰あらば

山に向いて

「此處より彼處へ移れ」

と言うに山は動きて

必ず彼處へ移らん

と述べているではありませんか

その当初においては、爪上の土の

如く、きわめて少數でしかないの

また仏祖の願業を体して、たとい
一人であつても世界恒久平和（淨
佛國土）の建設に立ち向つて行か
ねばなりません。

我々の立つところ、それが既に
大マンダラ宝土そのものであり、
その宝土こそ、法華經の付囑をう
けた勇者のみに与えられた世界な
のです。

世間の勇者は、みずから大マン
ダラの仏界に住しつゝ、三惡四惡
の惡道の中にも、修羅斗争の巷の
中にも、或は言語も通せぬ絶海の
孤島の中にも、身を挺して正法を
宣布して行くでありますよ。

世界動乱の今日、日蓮門下のな
すべき緊急のことあらば、それは

かかる法華經付囑の勇者を養成す
ることであり、若し宗門において
これがなされなければ、付囑の人
みずから如何なる苦難を忍んでも
この大事に當つて行かねばなりま
せん。

世界平和の道、それは遠く、且
つ厳しい道です。言語に絶する苦
難の道であります。仏勅をこうむ
つた人にあらざれば堪え難き道で
ありますよう。

種々御振舞御書にいわく

「日蓮さきがけしたり。和党中央
二陣三陣つゞいて迦葉・阿難にも
勝れ、天台・伝教にも越えよかし
ともかく憶えやすい番号です。御利用下さい。
せんことは無下の人々なり」

本妙庵に電話開通

身延山局 459 番

本妙庵に7月1日より電話が開通しました。

身延山局の459（シゴク）です。本妙庵は「至極」結構な修行
道場ですが、修行が厳しいので「しごく」意味かもしれません
ともかく憶えやすい番号です。御利用下さい。

本誌発行について

お詫びとお願ひ

編集部

本誌は、今年に入つて正月号と

二月号を発行し、昨年中、合併号の多かつたのにくらべて、ようやく発行も軌道に乗りかけたかのようにみえたのであります。却つて、それ以来およそ五ヶ月もの間

殆ど休刊にも等しい状態に落ち入つて、今日にまでも及んでしまいました。

休延の事由

このような休延状態となつた事

全国の読者よりは、矢のような

催促があり、身を切られる思いをしながらも、何とも申訳けのいたしました。心よりお詫び申上げます。

由としては

一、二月号の発行直後、身延山布教別動隊として身延山大学高校の学生有志十数名と共に九州へ西下し、二月下旬より三月中旬にかけて福岡県・熊本県・大分

県・宮崎県、そして最南端の鹿児島県に亘る五県下の街頭布教を展開し、一ヶ月間の連日の激

方に疲労困憊したため、布教後

においても原稿執筆が不可能状

態にあつたこと。

一、三月下旬には三泊四日間の身延山青年行学講習会があり、このため時間と労力が、更にさかれてしまつたこと。

一、四月六日には、昨年來、山梨県と身延町とが、それ／＼四十万円を負担し、追元が五十六万円を負担して、計百四十万の予算で着工していた本妙庵の、表参道の新設工事が、農道の名目で完成し、その開通式が本妙庵で県会議員、身延町長をはじめ地元有力者列席のもと盛大に挙行されたため、これに忙殺さ

れてしまつたこと。

一、それと同時に、この道路開通を契機として、更に本妙庵より身延山の裏参道へと、波木井の台地二キロの間に亘つて道路を延長新設する議案が起り、これにあわせて、まず本妙庵周辺の

西平地帯を開発するため、波木井区民の総会の決議によつて結成された西平開發委員会が、本妙庵周辺およそ二千坪の山林と畑を買収したり、寄附してもらいうという大事業が起り、本妙庵の僧人としても傍観出来ず、これに全力を傾注しなければならなくなつてしまつたこと。

以上が本誌発行の休延状態とな

らざるを得なかつた大きな事由であります。七月一日には本妙庵に電話も入り、道路の方も台風のために被害をうけた旧道の二・三ヶ所を改修すれば、麓から自動車で登詣出来るようになり、大へん便利になつて来ました。

また開発委員会によつて買収された二千坪の土地には、将来、青少年育成のための道場を建築するという議案も起きており、開山の輝く醒悟國本妙庵の靈跡も時代の脚光をあびるようになつて来ました。これも時の流れによるものでありましよう。

こゝに本誌発行の休延五ヶ月に

も及んだことが、やむを得ない事情に迫られていたためであり、また決して無為ではなかつたことをお知らせしてお詫びの一端に資したいと思います。

頁数の削減

さて従来の本誌は、一冊の誌代を五十円とし、そのワク内で、身延町梅平の藤田印刷所の絶大な協力により、一冊四十八頁だてといふ、ギリギリ一杯の印刷をして發行して來ました。

ところが最近の諸物価の急騰に伴い、紙代、印刷代、銅版凸版代も高騰したため、従来通りの発行が出来なくなつてしましました。

といつて誌代を値上げするわけにも行きませんので、誌代はそのままえおきにして、頁数を三十二頁だてにと削減せざるを得なくなつたのであります。まことに残念であります。どうか御了承願いたいと思います。

郵送料の値上げ

お願い

本誌の合併号や休刊によつて、定期通り発行されなかつた誌代の分は前納誌代に限り、そのまま次に繰越して通算させて頂きます。

前納誌代の繰越し

でありますので、これも御了承の上、御協力願いたいと存じます。

これは読者にとつて大きな負担となりますが、やむを得ないことを、御指導、御支援をたまわりますよう、伏してお願ひ申上げます。

暑中御見舞い申し上げます

昭和四十一年盛夏



身延山学生布教隊による夏の街
頭布教は大阪市とその衛星都市
において展開されます。

炎暑撃鼓行進の中、皆様の御健
勝をお祈りいたします。

鷲峰会

日本人の使命は、日本国土の中
に留める日蓮聖人開闢の法華
経を、全世界に宣傳することに
あります。世界の平和はこれに
より興ります。日本人の使命は
重大です。

皆様の御健斗を祈ります。

横浜講妙会



我が頭（こうべ）は父母の頭我が
足は父母の足、我が十指は父母
の十指、我が口は父母の口なり
（喰えは種子（へたね）と果子（こ
のみ）と、身と影との如し。
△日蓮聖人 忘持經事▽
父母あり先祖あつての私達の命
です。自分の命を大事に思うな
らば、まず父母を尊び、先祖の
供養を尽しましよう。

長谷川仏具店

九州最大の規模をもつ仏
具製造と卸し
福岡県直方市古町銀天街
電話（直方）五三四番

編集後記

昭和四十一年 第四卷 第三号
通卷 第二十八号

鷲峰 八月号

立ち渡る身の浮雲も晴れぬべし

絶えぬ御法（みのり）の鷲の山風

これは日蓮大聖人が身延山での御生活中に詠ぜられたといわれている有名な歌である。「鷲の山」とは釈尊が本仏として法華經を説かれたインドの靈鷲山のことであり、こゝでは身延山自体をさしている。大聖人は朝夕、霧たちのぼる身延の山容を眺めらるゝにつけても、身みずから厳しく法華經を実践していることによつて、本仏釈尊が常説法教化されている妙法の風が、靈山虚空会より吹き来り、これによつて身延に立ち渡っている暗雲も晴れて行くであろう、といふ深い感慨を覚えずにはおれなかつたことであろう。蓋し、このような感慨は、大聖人の二陣、三陣として統かんとする人々にとつても、必然うけねばならぬ世間の誤解や怨嫉・誹謗・迫害の中に、その人なりにも感ぜしめられるものではあるまい。

△白象△

定価 五十円 送料二十五円

昭和四十一年八月五日 印刷
昭和四十一年八月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井 醒悟園本妙庵

日 高 白 象

印刷所 山梨県身延町波木井 梅平

藤田印刷所

發行事務所

山梨県身延町波木井三区四一二五

鷲峰 会

電話（身延山）四五九番
振替（甲府）二〇九三番

誌代	半年分	四五〇円	（送料共）
贊助会費	一年分	九〇〇円	（送料共）
	一年分	三〇〇〇円	（分納可）

「本門戒壇建立の根源地は身延山」と遺言して遷化された法華經講讀の大居士井上清純先生の著書を、日蓮門下必読の良書として紹介します

如 是 我 聞

一、一二〇頁

定価 一、八〇〇円

日蓮聖人御遺文

六 大 部 疏

八八二頁

定価 一、五〇〇円

発行所 誠文堂 新光社

東京都千代田区神田錦町一ノ五
振替（東京）六二九四番

著者年譜 明治十三年特命公使の次男としてワシントンに生る。明治三十四年海軍兵学校卒業。明治三十九年本山日生上人に師事。大正二年東伏見宮親王の侍従武官。大正十年東宮殿下的渡殿に供奉。大正十四年より終戦まで貴族院議員。昭和二十年講妙会主宰、爾來法華經講讀を中心として全國を遊説、青年教化と著述に専念。昭和三十七年一月五日遷化、享年八十三歳。その前日まで法筵を開き法華經を講ず。特旨により天杯を賜わる。法号は報國院殿清澄法道日純大居士。墓を身延山上ノ山の丈六积尊堂のそばに建立す。